

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（看護学）	氏名	加利川 真理
学位授与の条件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論文題目                  Development of a home-visit nursing scale for helping spousal caregivers of terminal cancer patients develop positive perspectives of their caregiving experiences: A cross-sectional study                  （在宅で終末期がん患者を看取る配偶者の介護体験の肯定的な意味づけを促す訪問看護の評価尺度の開発）</p>			
論文審査担当者			
主査	教授	森山美知子	印
審査委員	教授	宮下美香	
審査委員	教授	折山早苗	
<p>〔論文審査の結果の要旨〕</p> <p>終末期がん患者を介護する配偶者は，他の家族員に比べ，うつ症状を引き起こす割合が高い。遺族の終末期患者への介護の捉え方が悲嘆症状に影響を与えていることから，生前の介護から死別後までの時期に，配偶者が介護体験を肯定的に捉えられるよう支援することは，訪問看護師にとって重要な役割である。また，訪問看護師の悲嘆への専門的な看護介入が，がん患者の在宅死の実現や遺族の悲嘆過程に肯定的な影響を与えることから，これらの看護実践は必要不可欠である。しかし，がん患者の配偶者に特化した，在宅療養開始期から看取り後までの訪問看護実践能力を測定する尺度は開発されていない。そこで，本研究では，在宅がん患者の配偶者が在宅看取りでの介護体験に肯定的な意味づけができるように看護師が支援できているかを評価する「訪問看護実践能力尺度」（Home Nursing Scale to Help Spousal Caregivers（HNS-HSC））を開発し，信頼性と妥当性を検証することとした。</p> <p>研究1では，在宅看取りを終え，半年から2年経過した配偶者13名のうち，介護体験を肯定的に捉えていた配偶者5名を対象に，在宅でがん患者を看取った介護体験の意味づけを明らかにすることを目的とし，半構造化面接調査を実施した。その結果，【永続する夫婦の繋がり】【最期までともに過ごした家族の存在意義】【終末期の介護の意味づけ】【夫のいない人生との対峙】【自己の生き方の熟考】の5つのカテゴリーが抽出された。</p> <p>研究2では，研究1の結果に基づき，これらの介護体験の意味づけができるよう看護師がどのように配偶者に関わっていく必要があるかを検討し，看護実践項目を挙げた。文献検討に基づき，配偶者の介護体験の意味づけを支える看護実践として考えられる記述部分を加え，看護内容を合わせた結果，115の看護実践項目が抽出された。次に，訪問看護師に面接調査を行い，抽出した項目が配偶者</p>			

の介護体験の肯定的な意味づけを支える看護内容として適切か否かを確認した。加えて、項目の内容妥当性と表面妥当性を検討した結果、最終的に 38 項目となり、これを尺度原案とした。

研究 3 では、尺度開発に向け、全国 500 か所の訪問看護ステーションを無作為に抽出し、終末期がん患者の主介護者で、自宅で看取った配偶者への死別前後の看護を実践した経験のある訪問看護師 1500 名を対象とする質問紙調査を実施した。604 名から回答が得られ、有効回答 453 名（有効回答率 85.6%）を分析対象とした。各質問項目について、天井効果に該当する 8 項目を削除し、I-T 相関を確認したうえで、30 項目について探索的因子分析を行い、26 項目 5 因子を採用した。5 因子は、第 I 因子からそれぞれ【今後の生き方に焦点化した支援】【悔いのない介護に向けた支援】【夫婦の結びつきの理解】【予期悲嘆への支援】【死別後の感情へのアプローチ】と命名した。第 II・III・IV 因子はがん患者の死別前の支援で、第 I・V 因子はがん患者の死別後の支援としてまとまった。これら 5 因子間に中程度から高い相関関係がみられた ( $r=0.37-0.67$ )。また、時期別では、死別前の支援である第 II・III・IV 因子と死別後の支援の第 I・V 因子の下位尺度とに中程度の相関関係がみられた ( $r=0.66, p<0.01$ )。確認的因子分析の結果、仮説モデルの適合度は  $\chi^2=679.63, df=289, p<0.001, CFI=0.917, RMSEA=0.077, TLI=0.907$  で、統計学的許容水準を満たしており、探索的因子分析を支持する結果が得られた。尺度の信頼性については、Cronbach's  $\alpha$  係数が 0.949（下位尺度 0.822-0.935）で内的整合性が確認された。弁別的妥当性の検証に用いた「Frommelt の医療者のターミナルケア態度尺度日本語版」（FATCOD-Form-B-J）と HNS-HSC とに低い相関関係がみられ ( $r=0.35, p<0.01$ )、各因子間においても低い相関関係が示された ( $r=0.19\sim 0.39, p<0.01$ )。収束的妥当性の検証に用いた看護師が行うグリーフケア評価尺度と HNS-HSC との相関係数については、「療養生活開始から終末期のグリーフケア尺度」（GCBT）、「臨終時のグリーフケア尺度」（GCDB）、「看取り後のグリーフケア尺度」（GCAD）と HNS-HSC とに中程度から高い相関関係がみられた（それぞれ  $r=0.64, r=0.45, r=0.72$ , すべて  $p<0.01$ ）。これらの結果から、収束的・弁別的妥当性が確認されたと考える。

以上の結果から、本研究で開発した尺度を用いることで、在宅がん患者の配偶者の介護体験に肯定的な意味づけを促す訪問看護師の看護実践能力を評価することが可能となり、看取り前後における配偶者ケアの質の向上が期待される。

よって、審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。